

第213回 「元気に百歳」クラブ「道草」句会（通信句会）開催

新型コロナウイルス第七波「感染拡大現象」は、やや下降線を辿り始めたと思われるものの、依然として「高止まり」状態にあり、保険局、病院の各関係の方々は、それぞれの部署で「ウイズコロナのあり方」を、検討がなされているようです。ただ、私たちはどういう環境になろうと防御策あるのみ、油断することなくウイルスを除去しましょう。

9月の句会です。今回も慎重を期して通信句会とし、次の方々が参加されました。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、
中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、
芦尾白然（16名）。

今回は皆さんに兼題を提示する段階で、送信して下さったメールには「提示された兼題を理解し、詠まれる句の中に登場させる季語を主役にしましょう」との教示がありました。皆さんもこの教示を尊重され、句を詠む中で活かされたと思います。また、今年に入って始めました「ひと言」メッセージが、増えてきているのも、こうした俳句を詠む姿勢の確立と言いますか、俳句に向かう気概が、醸成されているのでしょうか。

皆さんが選ばれた今月の優秀句をご高覧下さい。

兼題1「月」

◎『内浦に漁火残る無月かな』	晶如	天3
◎『漆黒の森を出れば月の原』	憧岳	天1
◎『独り笑み月に覗かれ背すじ伸び』	栄女	天1
◎『月の夜のコロナの街の灯の細き』	清助	天1
◎『ほろ酔いを家路に誘う月明り』	和感	☆9

兼題2「小鳥」

◎『朝定時数羽の小鳥と珈琲を』	一光	天1
◎『曙の小鳥の声で幸の来る』	蒼樹	天1
◎『小鳥来る枝の繁みに声ひそめ』	月草	天1
◎『信濃路の朝食の連れや小鳥来る』	栄女	☆12

兼題3「当季雑詠」

◎『花芙蓉人やはらかに壊れゆく』	荻女	天4
◎『みの虫に狭さほど良き蓑の家』	晶如	天1
◎『吹く風も野原も山も秋の色』	歌多音	天1
◎『地味なれど露草凜と花青し』	月草	天1
◎『箸置きてまた盃の夜長かな』	多佳	☆7

兼題1では、晶如さんの句「内浦に漁火残る無月かな」が、天賞三つを獲得しました。兼題が「月」という場合、季語「無月」は傍題ということになるのでしょうか。こうした経験は初めてのことなので、学んでおきたいです。句としては中七の「漁火残る」に、読者の共感が集まったのではないのでしょうか。天賞推挙のコメントを拝読しますと、「暗闇の海に漁火が遠く見える様が、秋の侘しさを感じさせる」とありました。次に憧岳さんの句「漆黒の森を出れば月の原」が、天賞一つを獲得しました。この句は「不安なほどの漆黒の森の中から、広々とした原へ出た。そのとき、月の光に現れた青く見える原の美しさ」に作者はシャッターを切りました。天賞推挙のコメントにもありますが、下五の「月

の原」が素敵であると。森の漆黒という表現が、月の原の青を、読者に連想させたのでしょう。次に栄女さんの句「独り笑み月に覗かれ背すじ伸び」が、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントには、「中七の『月に覗かれ』という表現が面白く、背すじ伸びという前向きの姿勢が好ましい」とありましたが、いやあー全く、言い得て妙ですね。もう一句、清助さんの句「月の夜のコロナの街の灯の細き」も、天賞一つを獲得しました。中七、下五に表現されているように「月の夜とはいえ、コロナウイルス感染拡大は、街の灯の心細さを感じさせる」ということでしょうか。天賞は付きませんでした。奥田和感さんの句「ほろ酔いを家路に誘う月明り」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。ほろ酔いが迎える家路を、照らす月の明かりが、妙にアットホームな温かい気分させてくれます。読者の共感もそこに集まったように思いました。

兼題2では、一光さんの句「朝定時数羽の小鳥と珈琲を」が、天賞一つを獲得しました。庭にやってくる小鳥たち、ちょうど朝の珈琲を楽しむ時間と重なるのでしょうか。一日の元気を確保する貴重な時間になって居られるようですね。爽やかさを感じました。次に蒼樹さんの句「曙の小鳥の声で幸の来る」が、天賞一つを獲得しました。前述の一光さんの句の時と角度を、少し変えた句ではないかと思いました。まだ朝の布団の中で感じる「幸せ感」を詠まれた句ではないでしょうか。朝起きた時に感じる「幸せ感」とは、素晴らしいですね。このとき、一日中の全部の元気が湧いてくるのでしょうかね。もう一句、月草さんの句「小鳥来る枝の繁みに声ひそめ」が、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントに「小鳥が飛んできたので鳴き声を聞こうと声を潜めた様子がほほえましい」とありました。遠くから渡ってきた小鳥たちも、嬉々として鳴き声を上げているのでしょうか。天賞は付きませんでした。栄女さんの句「信濃路の朝食(あさげ)の連(つ)れや小鳥来る」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。信濃を旅しているときの朝の様子を詠まれたのでしょうか。小鳥の鳴き声で元気を貰い、今日も楽しい旅を続けようという、作者の気持が溢れています。句を読ませていただくだけでも、元気もりもりです。

席題3では、荻女さんの句「花芙蓉人やはらかに壊れゆく」が、天賞四つを獲得しました。中七、下五にあります「人やはらかに壊れゆく」が、何とも読者を不思議の世界へ導いてくれました。「やはらかに壊れてゆくとは、一体、人がどうなっていくということか」と。ここでは多く言えませんが、四人の方が書かれた天賞推挙のコメントを読み比べて下さい。何か違った考え方も思いつくかも知れません。

次に晶如さんの句「みの虫に狭さほど良き蓑の家」が、天賞一つを獲得しました。部屋の大きさを表現する場合、普通は「広さ」と表現して方便を述べるのに、このみの虫は、簡便であれば出来るだけ狭い部屋が良いということなのか、句の中で「狭さ」と表現しています。「狭さほど良き」という訳です。天賞推挙のコメントに「身の丈ほどの幸せをモットーにし、横着だけれど居心地を一番とする人生を行く」と、書く人の望むところという訳です。まさに人生いろいろです。

次に歌多音さんの句「吹く風も野原も山も秋の色」も、天賞一つを獲得しました。行楽の一日、その行く先々で出会った秋を思い出されているのでしょうか。でもどこか秋の侘しさのする景であったようにも思われます。読者にも作者にも、胸に熱いものが走ったのではないのでしょうか。次に月草さんの句「地味なれど露草凜と花青し」が、天賞一つを獲得しました。露草の青色の花に焦点を当てた句の、凜とした句の勢いに、読者の美観が刺激を受けました。もう一句、天賞にはなりませんでした。多佳さんの句「箸置きてまた盃の夜長かな」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。中七、下五の「また盃の夜長かな」という、いつもの平静を得られる安心感と、上五の「箸置きて」という言葉の中にある秋の喜びが、票を集めたのだと思われまふ。何故か童謡「里の秋」の歌詞が、頭の中で回転し始めました。

冒頭の方でも申し上げましたように、今月は天賞推挙のコメント並びに「ひと言」メッセージが、一段と充実してきたと思いました。何度か読み返しているうちに、また新たな発想が生まれます。そのうちに新しい句まで浮かんでくるかも知れません。向上していくための、貴重な言葉たちだと思います。

来月は10月です。晩秋です。秋も一段と深くなります。芭蕉の句「秋深き隣は何をする人ぞ」が、思い出されます。余命幾ばくもない芭蕉が、大坂御堂筋の人様の家の部屋を借りての病床、そこで前述の句を詠みました。達観した中での一句です。その10月、皆さんにはお元気に過ごされ、令和4年の残る日々を充実した時間にしましょう。そして「道草」に集い、俳句を楽しみましょう。

白然記